かぐらおか

（題字は初代学長　山田守英氏）

第 86 号

平成８年３月25日

編集　旭川医科大学
　　厚生補導委員会
発行　旭川医科大学教務部学生課

（写真撮影　動物実験施設　稲場　　茂）

春を待つ

第18期生を送るにあたって……清水　哲也… 2
第18期生を送るにあたって……北　　進一… 3
旭川医科大学第18回卒業者名簿…… 4
卒業にあたって……長谷川公治… 4
卒業にあたって……瀬川　利恵… 5
母校を去るにあたって……中沢　洋三… 5
学生教育について……小野　一幸… 6
定年(停年)近き日に論語を……水戸　廸郎… 7
退官にあたって……竹光　義治… 8
教授就任にあたって(わが街)……中村　正雄… 9
平成７年度１年のあゆみ……10
クラブ今昔(ゴルフ・JAZZ研究会)……12
研究室紹介(臨床検査医学講座)……13
講師に昇任しました……13
前期分授業料免除について……14
学生教育研究災害傷害保険について……14
日本育英会奨学生の募集について……14
国民年金への加入について……15
「新歓合宿」のお知らせ……15
学内ニュース……15
訃　報……安田　　博…16
窓　外……笹嶋　唯博…16

第18期生を送るにあたって

学　長　清水　哲也

皆さん、学士学位記取得おめでとう。

６年間一貫教育を受けられ、今、学位記を手にされた皆さん、この間、やさしい慈愛に満ちた眼差しで見守ってこられたご父兄の皆様のお気持ちに思いを馳せるとき、まさに万感、胸に迫るものがあります。

この想いは、全力を尽くして今日まで教育に当たってこられた全教官に共通した感慨でもあります。

私どもが、あえて卒業式という言葉をさけている所以のものは、今日という日は、事の終わりではなく、これから皆さんが立ち向かって行く「医学の道」の厳しさを思うとき、まさに事の始まりに当たるからであります。

医学、医療をめぐる環境条件は、まことに険しく厳しいものがあります。

一瞬の油断、ささいな齟齬というものが、医師としての社会的生命を、まさに一瞬にして失う局面が、いたるところにあるのです。

それ故にこそ、医師ほど生涯にわたる学習、いわゆる「生涯学習」が、強く強く求められている職業は他にないのです。

医学や医療の対象は、人命でありますから、当然といえば当然であります。

皆さんが、本学で学習されたものは、単なる医学の知識だけではなく、人間性の成長をかちとられたことではないでしょうか。「教育基本法」でも、人間の成長を教育の目的であると言っております。

人間の成長とは、決して単なる知識の詰め込みではなく、常識や感性、優しさといったトータルな成長でなければならないと強調した先達の言葉があります。

「医の原点」、「医のこころ」とは、人の「いたみ」をわが「いたみ」ととらえることに他なりません。

病に苦しむ方々の、「悩める心」を、「苦しむ身体」を皆さんの豊かな感性と暖かい手のひらの「ぬくもり」で、病苦にさいなまれている人達の「こころ」と「からだ」をしっかりと受けとめることであります。

個々の症状や疾患に目を奪われて仕舞う、診療技術中心の浅薄な職業人ではなく、透徹した人生観と高潔な価値観にもとづいて、患者さんの全体像を「そこはかとない」思いで、やさしく包みこんであげることのできる全人的医療をめざす医師になってほしいのです。

「医療」の真の意味は、まさに「全人的医療」という言葉によって表現されるように、ただ単に診断し、治療するといったコンセプトから、予防医学、社会的リハビリテーションまでも含む概念、つまり保健、医療、社会福祉の「在り方」までも総合的にその視程の中にとらえる考え方が強く求められるに至っております。

したがって、かかる社会的動向に対応するためには、看護要員などのコメディカルスタッフはもとより、包括医療にたずさわる全ての構成員から全幅の信頼が寄せられるチームリーダーの資質もまた強く求められています。

さいわい、本年４月から、本学医学部に、「看護学科」が新設されます。医師の養成だけといった片足立ちの状態から、今、まさに高次機能を有する有能な看護系職員の教育が開始され、相互に、医師および看護系の立場から、医学ならびに看護学の本質を学びとることが出来る、複数機能を有することになります。

数年後に、母校を訪れた皆さんは、看護学士や看護学博士と明日の医療を「デビート」することが出来ることでありましょう。

2025年には国民の４人に１人が65歳以上の老齢人口で占められ、この国の人口動態の激変は、病める人達、老いた人達に対する優しさと感性あふれる医師像が求められるに至ります。

本日、学位記を手にされた皆さんのご健闘を祈って、「はなむけ」の言葉と致します。

第18期生を送るにあたって

第６学年学年担当　北　　進一

旭川医科大学第18期生の皆さん、ついに卒業の日が来ましたね。おめでとう！

６年前、いや数年前の人もいるが……平成２年４月６日の入学式当日、体育館に並んだ皆さんは、喜びの中にも緊張感をみなぎらせて立っていたのを私はよく憶えております。まさか５年・６年時の学年担当になるなんて夢にも思わずに、若々しい合格者と後席のうれしさと安堵した父兄の顔を見ておりました。本学への入学後は、医学生としての長い道のりを歩み初め、学年毎に増大する勉学に追われ、定期試験、追試、再試と厳しい日々を送ってきたことでしょう。しかし見事に乗り切って本日を迎えた努力に敬意を表し、心からお祝い申し上げます。

さらに皆さんは、小学校以来からの学校生活に区切りをつけることになるのですが、これは長い人生の一つのハードルを越えたことを意味するものであり、これもまた祝辞に値するものです。

しかし間近に医師国家試験というハードルがありますので、気を引き締めておかねばなりませんが、本日は卒業を迎え、ハードルを越えた喜びに存分に浸っていただき、学長の立場上のお硬い話は聞き流してよいでしょう。責任は私が取ります。

皆さんのこれからの人生は、臨床医あるいは医学研究者のどちらを選択しても、前に立ちはだかる沢山の山がありましょうが、これらを越える技術と判断力そして強い精神力を身に着けていただきたいと心から念願いたします。

老婆心…いや老爺心ながら、私のこれまでの若者との付き合い（本学の学生、わが子、私の医局員など）を通して、これはまずいと感じていることがあります。もし自分に思い当ることがあれば、大事なことですから是非参考にして下さい。

その一つは、親友を持っていない者が多いこと。喜怒哀楽、何でも心から話し合いのできる、生涯変わらぬ友情を持ち続ける友人を選ぶことです。今回の卒業のごとく一山征服した時に、手を取りあって喜んでくれる親友がいることは何にも代えられない宝です。

その二つ目は、目標を持っていないこと。最も学生中は卒業にこぎ着けることと国家試験の征服が最大の目標でしょうが、医師としての将来目標は設定しておく必要があります。私の場合、目標は遠近２つを持つことにしております。志はあくまで高くといわれますが、しかし一旦挫折したとき、すべてを見失っては何にもならないので、手近なところにもう一つ着実な目標をおき、普段はそれを目指すというものです。

三つ目は、平衡感覚を持っていないこと。何がなんでも絶対正しいと一つのことを信じこみ、反対論に耳を貸さない偏狭な姿勢は、方向を誤ることになり勝ちです。常に「私はこれで正しいのだろうか」と自分に問いかける謙虚さを失わないよう努めて下さい。

最近はあまり聞こえてこないけれど、他大学の医局あるいは病院に勤務した本学卒業生の評判は、「素直で折り目正しい」とすこぶる良好でした。これは教育を担当した教官のご苦心に対する何よりの謝恩であります。さて、皆さんの評判や如何に！　学年担当者としては、大いに気になるところです。

素直で謙虚の上に、今後は根性とたくましさが身に着いた人間に成長してくれることを、心から念じております。

第18期生の皆さん、本学の誇りを堅持して、明日の医学を背負うべく、人生の大航海に元気一杯船出して下さい。

卒業おめでとう！

（歯科口腔外科学講座 教授）

卒業にあたって

第18期卒業生　長谷川公治

この日本最北端の医科大学に入学してから早6年がたち、このたび無事に卒業することとなりました。

入学当初は長いと思っていた6年間も、特に後半の3年間はあっという間に過ぎてしまったような気がします。

今、6年間の学生生活を振り返ってみても、6年前に自分がいつもどんな事を考え、どんな事をしていたのかもうあまり覚えていません。ただ、初めてこの大学に来たときに、ヒューヒューと風の音だけが聞こえ、寒くて寂しいところだという印象を受けたことを思い出します。しかし、豊かな自然を身近に感じながら学問をすることは素晴らしいことであり、特に私は5月から6月にかけての陽気が大好きで、晴れた日には講義室を抜け出してひばりの声を聞きながら日向ぼっこをしたり、ドライブに出掛けたりしたこともよくありました。又、旭川は道北の拠点であり、道内各地へ足を運び易く、在学中に色々なところへ行けたことも良い思い出になりました。

私は入学試験の面接で、「もし本学に入学できたらどの様な学生生活を送りたいか？」との質問に、「多くの人と知り合い、様々な考え方に触れ、視野の広い人間になりたい。」と答えたのを覚えています。実際の自分の学生生活はあまり社交的ではなかったかもしれませんが、それでもこの6年間に少しは成長し、物事を多面的に見る事ができる様になったのではないかと思っています。特に臨床実習では多くの患者さんや先生方と触れ合い大変勉強になりました。又、とても個性豊かで愉快なグループの仲間達と共に1年間実習できたことも幸運でした。

こんな私でも無事卒業を迎えることができたのは、諸先生方をはじめ本学関係者の方々、共に学んだ仲間達、そして私の家族のおかげだと思っています。これから立派な医師になることで少しでもこの御恩を返して行ければ幸いと思います。本当にありがとうございました。

卒業にあたって

第18期卒業生　瀬川　利恵

平成２年３月に、旭川医大からの直接の電話で合格の知らせを受けてから６年が立ちました。３月末の時期はずれの入学手続きに行くと、私と同じような幸せそうな学生がいたのが印象的でした。

卒業を目前とすると６年前に入学した春を思い出します。神楽の岡にそびえる白亜の建物を見たとき大学・医学に対する夢や希望を抱いたものでした。ただ４月の入学式に桜ではなく雪にふぶかれたときは、夢も希望も少しこおりつきそうになりました。

それでもやはり旭川の自然は素敵でした。春はエゾムラサキツツジの紫、夏はラベンダーの紫、牧草の緑が美しく、秋にはエゾ松や紅葉樹のおりなす景色は風景画のようでした。ナナカマドは実家の庭にあるものとは違い、緑の葉にまっ赤に映えていました。冬は空気がすんでいて星がよく見えます。ただ酒を飲んだ後夜風にふかれながら星を見るには寒すぎました。旭川医大は大雪のすそ野に広がる庭の中にあるようでした。

この自然の中にあっても少なからず苦悩や倦怠はありました。それを予防・克服するには、自分の注意を外の世界に集中することである、とこの６年間で気付きました。自分が最も望んでいるものが何であるか見つけること、そしてそれらを徐々に数多く増やしていくことです。例えば、さまざまな知識(医学と医学以外）や、私が愛情を感じている人たちなどです。それらへの働きかけは、それぞれ何らかの活動を促しその興味が生き生きしている限り、倦怠を完全に予防してくれます。医学を学ぶ者にとって、医学以外の知識と人間に興味を持つことは、非常に大切なことであると思います。

これから私は、学問から得た知識をいかす専門職としての楽しみと、じかに苦しんでいる患者に接しなければならないという人間としてのつらさの２つの面を持つ実際の医療と対面しなければなりません。そのためには、今まで以上に患者と対等に接しうる人間性を獲得するため努力していかなければならないと思います。

母校を去るにあたって

第18期卒業生　中沢　洋三

予備校の寮の狭い部屋で、何通かの願書と日本地図を机いっぱいに広げ、まだ見ぬ新天地に思いを馳せていた頃からもう６年が過ぎました。最後にこの地を選んだのは、「北の国から」に感動したからという格好の悪い理由からでした。夢の医学部、憧れの北海道にこうして意気揚揚と乗り込んで来ました。

しかし、現実は厳しく、新しい環境、北海道人の気質に全く馴染めず、極め付けは甘い勧誘の言葉に騙され入ってしまった野球部。目付きの鋭い主将に辞めたいの一言が言い出せず、後悔ばかりの毎日を送る典型的な旭医１年生となってしまいました。

あれから６年、辞める筈だった野球部に今ではすっかり根を下ろし、随分な先輩風を吹かしています。私を騙した先輩方は一人前の医師となり、私が騙した後輩達も東医体チャンピオンという言葉の響きに心魅かれる学年に達しました。そして今年もまた、甘い言葉に誘われかわいい新入生達が加わりました。彼らの多くは私と同じく本州出身で、彼らを見る時はいつも６年前の自分を重ねてしまいます。彼らも故郷を遠く離れたこの地で、様々なストレスに思い悩み、戸惑うのでしょうか。見ていると随分楽しそうですが。数年後には東医体のあの舞台に憧れ、多くを犠牲にし、泥にまみれているのかもしれません。

６年もある医学部、600人しかいない小さな大学、クラブの練習と試験に縛られる不自由な生活、とかく〝つまらない〟という悪評ばかりを耳にするこの大学ですが、同じ仲間と同じ事ばかりに６年間打ち込めば、付け焼き刃では決して味わえない世界を垣間見ることもできます。もっと広い自由な大学だったらきっと言葉を交わすはずもなかった人も、嫌いだった人も、私を嫌いだった人も、６年経てば皆いい仲間。

医者は体力だから今のうちに体を鍛えなさい。練習は軽い、心配するな、そんな言葉で始まった６年間。現役引退とともに体力は下降線をたどり、残ったのはクラブで痛めた古傷の痛みと、東医体優勝のメダルと、この地を去るのが惜しくなる程のいい仲間達でした。

学生教育について

解剖学第一講座　教授　小野　一幸

私は本学に来て16年間、水を得た魚の如く自由に働かさせて頂きました。これは偏に歴代の学長をはじめ教授の皆様、職員の方々のご指導、ご厚情の賜と深く感謝しております。特に同名講座の松嶋教授にはご理解とご協力を頂き厚く御礼申し上げます。

本学では精神科医を必要とする学生はおりましたが、自殺者が一人もでなかった事は幸いでした。ただ医師を目指して本学に入学したのに、医学の講義を受ける前に、または少し受けた状態で退学した学生がおった事は甚だ残念でした。教育は方程式がなく極めて難しい問題であります。退官にあたり教育について私の考への一端を述べさせて頂きます。

〝本学の学生進級・留め置き状況〟を見ますと、ここ10年間の留め置きの学生数は第一学年が10%強で一番多く、学年が進むにつれて減少しております。１年の時にふるいにかけたから上の学年で留め置きが減少したとは言い切れないと思います。きちんと勉強しない学生が一番良くないことだけは確かです。しかし１年の時留年するとショックからなかなか立ち上がれない学生もおる様に思えてなりません。

旧制の医科大学に旧制高校の理系の学生が入学するのは当然でしたが、ある医大では文系の学生も受け入れておりました。文系の学生だった方がその医大を卒業し、母校の立派な教授になりました。本学の入試にも前期日程を設け、多様化する時代の需要に対応できる人材を確保する事になり喜ばしい事です。しかし個性ある人材を入学させたのに不得意な科目の単位を取れず留年生が多くなったとしたら何の為の前期日程入試なのか分からなくなります。何も程度を下げろとか、点数を甘くせよとか言っているのではありません。私は本学を去るので知るよしもありませんが、前期日程で入学した学生の動向を見たいものだと思います。

ある大学の教授が医学部と他の学部の講義を同時に担当しておりました。その教授の医学部学生への定期試験の問題は難しく多数の学生が不合格になり、他学部学生への問題は易しいので大部分の学生はパスしたそうです。どう言う事なのでしょうか。またある大学に医学部が設置された時、他の学部の教授はヘソを曲げて講義をしなかったそうです。そこで致し方なくその科目に関連した研究で学位をとった医師達に講義を依頼した所、臨床に直結する講義をしたので学生には大好評だったそうです。講義に興味を持たせる事がどんなに大切か分かります。私も学生時代、波長が合わない教授の講義には真面目に出席しなかったような気がします。

私が非常勤講師をしております大学で「学生による授業評価アンケート」を学生にとりました。〝このアンケート調査は、授業担当教師が学生諸君と共に授業をより改善することを目指して実施するものです〟という大学からの協力要請でした。内容を抜き書きしますと、①授業に興味が持てたか。②授業の内容は理解出来たか。③教師の授業に対する熱意を感じたか。④教師は授業において重要なところを強調してくれたか。⑤教師は授業の中で、学生の質問、発言等を促したか。⑥学問をする雰囲気を保つように教師は努力したか。等々の設問に対して５段階評価をする事になっておりました。私としてはさらに、①試験問題は成績の評価に適切だったと思うか。②講義の内容に沿った問題がだされたか。③実習には教師全員が参加して指導してくれたか。等の設問も必要ではないかと思います。

学生の意見に耳を傾ければ、更に教育効果が上ることでしょう。本学においても学生を教育する上の参考になれば幸いです。

最後に本学のますますの発展を祈念します。

定年(停年)近き日に論語を

外科学第二講座　教授　水戸　廸郎

表題の定年の〝テイ〟を停の字にするか定を選ぶかに、まず、迷う。辞書には同義語とあり、どちらを使っても良いとある。念のために漢和大辞典をひろげる。停は、とどまる、やめるとある。さらに停を冠した字句に目を転ずると、停学、停滞、停職と不都合な言葉が並ぶ。一方の定は、さだまる、さだめを意味する。熟語には定心（落ち着いた心）定本（標準となる本）、定見（はっきりと定まった意見）、定理（永久にかわることのない真理）定評などと模範生的な意味合いが多い。ならば、字句から連想される感じが良い方を選ぶことにする。

今年の２月26日で満65歳を迎えた。定年退職の日まであと１カ月。読む読まずにかかわらず本棚から床の上まで積み上げられた書物で教授室は場末の古本屋と見迷う様、自宅の書斎なる部屋は足の踏み場をさがし求めなければならない状態である。

古色蒼然たる本や、いかばかりか老化防止に役立つと期待して求めた新刊書、古きも、新しきもそれぞれに思いがあり、愛着もある。一切の未練を断ち切る時期、十把ひとからげに括りつけ整理しなければ、これからの第二の人生が停頓する。書斎なる部屋に立てこもり、書物の山を動かす。戦中派の悲しいばかりの物への執着心を断つに断たれず、手にした多くの本は単に左から右へと移動するに過ぎない。

そんな本の中に、北大予科で教んだ〝簡野道明著、論語解義〟なる700頁に及ぶ書が出てくる。猥漢と渾名された倫理学の教授が選定した教科書である。肉体労働の報酬でやっと求めたものである。にも拘らず、教授の講義は渾名どおり金瓶梅の楊貴妃の話で大半の時間が費やされ、終業間際に、論語の一節を独特の抑揚で吟じて終わった。大戦後の経済情勢が最低の時期の印刷物、50年近い歳月で文字はにじみ、かすれている。懐かしさで頁をめくる。

〝子日、吾十有五而志千學・・・。譯讀〟子日く、吾十有五にして學を志す、三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳に順(したが)ふ。七十にして心の欲する所に従えども、矩(のり)を踰(こ)えずと。

年齢に若干の誤差を加味すれば、吾が人生も聖人の孔子に似るかと思わせる出だしである。17歳で北海道大学の門をくぐり、医学部卒業、大学院を終了して、30歳にして、やっと文部教官、助手、また一家の家長となる。しかし、40歳以降がどうも符合しない。聖人君子に列することにならなかったのは、これかと合点する。論語読みの論語知らずの譬えどおりである。

44歳の春、1975年の４月、旭川医科大学、外科学第２講座、教授として赴任した。研究棟も附属病院も無い大学では、総てがゼロからの出発であった。20年を経た今年の私の賀状には〝光陰矢の如しを実感する〟と書いてしまった。秀吉ではないが、〝難波ならざる旭川のことは夢のまた夢〟のように一瞬感じたからである。が、20年の歳月を振り返ると私なりに一年一年が、〝天の我に命ずる所似の者の大いなるを知りて、之が実行に務め・・・〟というほど大袈裟ではなくとも、匹夫の才と能を振り絞り実行してきた感が深い。教室の創設は当然のことながら、大学附属で唯一のドッグファームをもつ動物実験施設にはじまり、多難であった手術部、材料部、輸血部の創設にたずさわり、60歳にして、附属病院の管理運営を担ったことどもが、走馬燈のように脳裏をかけめぐる。そして、それぞれの事項が満点でないにしろ、及第点に達し、やっと卒業の日を迎えたといえよう。勿論、私一人の力量ではないことは当然である。教室は教室員一人一人の、また、同門の方々の、さらに大学、病院は、それぞれの職域の方々の協力、支援があってのことであった。20年間お付合いを願った一人一人の仲間、友人の方々を思い起し、感謝の念で胸がふくらむ。これを停雲というそうである。白銀に輝く大雪山連峰を背に停停（すらりと美しい）とした旭川医大を目にすると、定年のテイはやっぱり〝停〟と書くべきかと惑いながら、古ぼけた教科書を再び書棚に戻す私である。

退官にあたって

整形外科学講座　教授　竹光　義治

1975年夢と希望に燃えて九州から遙々旭川医大に着任し21年がたった。出発前福岡の桜は満開近かったが、旭川の住宅はまだ雪の山で路は凍っていた。しかし、医大創設のことを思うと寒さは気にならなかった。あれから20年駑馬に鞭打つ毎日であったが、大過なく元気に退官の日を迎えたことを皆さんに心から感謝している。もともと教室の主催者になるなど考えてもいず、勉強もあまりせずにいた私が1973年春であったか、旭川医大に決まった知らせを受けびっくりした。恩師の一人当時の西尾教授から言われたことは、「北海道は天国だ、しっかりやってこい」であった。なれない北海道での生活を想い、また、一生懸命やれば天国になるぞとの励ましでもあった。先生は私をよくご存じであった。

市立旭川病院の昔の病室を借りて教室創りが始まった。スタッフは北大から参加してくれた原田助教授、佐藤邦忠助手であった。教室の図面を前に毎日大きな声で議論をして出来上がったのが今の教室であるが、今になってみると問題点も多い。市立病院の庭の大木に来て鳴く郭公の声は九州人には珍しく感嘆した。

附属病院は先に西病棟だけ出来た。６階西ＮＳは３内科と整形外科の混合病棟であった。夏のある日３内科と神楽岡公園でソフトボールの試合をしたところレフトを守っていた並木教授がフライを捕ろうとしてアキレス腱を断裂。野球どころではなくなり小川教授の麻酔で縫合術をしたが、無事歩けるようになってほっとしたことを覚えている。

さて、新設医大では医学教育セミナーが開かれ、ここでまず教授錯覚なる言葉を教えられた。講義をしてたくさん知識を詰め込んで教えたから全部覚えた筈という錯覚に陥るな、ということである。このセミナーは目新しく勉強になり、その後の学生教育に役立った。

Postgraduate 教育はマンツーマン教育をモットーとし、脊椎、股関節、下肢、上肢＋マイクロの４つの班をまわる毎に試験をして修得度をチェックした。入局して１～２年は大学で基礎教育、次の３年～４年間は関連教育病院をローテーション、その後教室に帰って１～２年間高度の研修をし、次に希望すれば専門を持つよう指導した。北海道では札幌や旭川以外は手や足だけの専門医より整形外科 generalist を育てる要望度が高いと判断したからである。

教室員が育たない内から道内の多くの病院から人材要請が来た。本当にありがたいことであった。北大の前教授が九大の先輩でそのお弟子さん達が親しみをもって応援してくれたことが嬉しかった。断りきれず整形外科医不在の病院にも研修病院の基礎を作るため、若い医師を派遣し心配も多かったが教室のスタッフがバックアップし、院長達も温かく見守ってくれた。医師を派遣すれば評判がよいので患者がすぐ増加し年々増員の要請が来た。大学設立の目的が臨床医を育てることであったが、教室の基礎研究要員は万年人手不足の状態が続きとうとう今日に至った。私の非力が祟った。

教室の研究はまず疫学調査から始めた。北海道の整形外科疾病の実態を知り、かつ旭川医大の草の根を植えるためである。学校検診では側弯症等を調査し発見しては大学へつれてきて治療をした。次の農村での中高年者腰痛と姿勢異常、それと膝痛である。北海道は腰曲がりと腰痛が特に多い。その原因をつかむことは腰痛症の原因を勉強するのに適切なテーマと思ったからである。なお、基礎研究の面で本学機器センターの果たす役割は全国に誇れるものである。

教室を預かって思うことは、「学道両全」の重要性である。これは九大整形外科の訓であるが、この言葉を旭川医大の若い医師諸君にも贈りたい。更に研究面で挑戦して欲しい。北海道に来てたくさんの人達に応援して貰い本当に「天国」であった。今日まで教室を育ててくれた歴代学長初め全教室の皆さん、職員の皆さん、それと美しい北海道の大自然に厚く御礼を申し上げたい。

教授就任にあたって（わが街）

化　学 教授　中村　正雄

私は昨年３月に退官された化学教室担当内田教授の後任として同８月に着任いたしました。内田先生を身近にした教官の方々から、先生の教育者としての姿勢や学生に対する接し方をうかがうにつれ身の引き締まる気が致します。着任間もないことですので、これまでの経歴を述べ新任の挨拶とさせていただきます。

私が生まれたのは敗戦間もない関東平野の真ん中に位置した田園都市。旧い街道に沿った生家から子供の足で10分も歩くと、畑や田んぼが広がり、良く晴れた日には東から関東平野を囲んだ筑波、日光連山、秩父それに富士山を望むことができました。物心ついたのは昭和20年代の後半ですが、街並はどこも色彩に乏しく娯楽と呼べるのはラジオや広場での野球が中心でした。野球といっても道具は無く、棒とゴムまりと三角ベースのローカルルールでの遊びでした。当時幼な友達と良く自転車で遠出をしましたが、その頃の記憶が今でも良く残っています。久し振りに帰郷するとその記憶との差に閉口することが良くあります。私達が時折遊び場とした神社や寺は高い杉や雑木林で覆われていましたが、道路の拡張や宅地造成で切り倒され裸になった神社や祠はひどく貧弱に見えて気の毒な思いにさせられます。

地元の旧い高校を卒業し昭和40年に北大理類に入学し札幌に移りました。入学式に合わせ東京を夜行列車で発つ頃は桜がほころんでいましたが、連絡船を降り渡島半島を走る汽車から見える原野は春の雪で輝いていました。当時の私は、やっと親から遠く離れた解放感と不安とで一杯であったと思います。昭和49年に大学院理学研究科化学専攻博士課程を修了しました。修士１年の時、フランスに端を発した学生運動が日本の大学を席巻し北大にも波及しました。当時の教授達はひどく学問的な自負心が強かったように思います。学生達と教授達の議論は戦前の教育体制を引きずり、相手に対する幻想をなかなか越えられず平行線になるばかりでした。

このころ実験を全くしていません。幸い私の居た研究室は研究テーマに事欠けることはなく、修士論文提出間近くなってヤマに当り遅れをとり返すことができました。同期で学位を一緒に取得したのは６名でした。挨拶にうかがった教室委員の教授から卒業時に６人とも職が決まっていないことを告げられました。更に、〝仕方なしに外国へ留学しても帰国して良い職に就けるとも思えない。〟と追い打ちをかけられました。友人達の名誉のために言えば、この頃に留学した人達はその後も良い仕事をしています。日本経済は依然として高度成長を続けていましたが、相変わらず理学博士は売れ筋ではありませんでした。引き続き、学術振興会の奨励研究員として１年過ごした後、北大応用電気研究所生体物理部門の助手として採用されました。これで安心して研究が出来ると思いましたが、さっぱり成果が得られず泥沼の２年が続きました。生活が保障されて論文が書けないと逃げ場がなくなります。当時の私の研究テーマは酵素と基質との電子のやり取りに関するもので、生体に於るラジカル反応機構の基礎をなすものでした。ついで甲状腺ホルモンの生合成機構が酵素レベルでどう制御されるかについての共同研究を行い、限られた材料からどうホルモンが合成されるかの仕組みを明らかにしました。

昭和61年には文部省在外派遣でニューヨークの下町にある医科大学に滞在しました。ここブロンクスはＲ・デニーロの近作や彼が主演した〝レージングブル〟、〝レナードの朝〟の舞台となった所です。滞在中の私のテーマは制癌剤ブレオマイシンの酸素活性化に関したものです。失敗の多い日々でしたがこの街も忘れ難いです。何故なら、ここで今でも親交のある友人達を見つけることが出来たからです。

旭川に着任してから、もう半年が過ぎてしまいました。周囲の手をお借りしてやっと生体のフリーラジカル反応の研究を再開しました。私にとって旭川は４番目のわが街になりそうな気がして来ました。

平成７年度　１年のあゆみ

4月

７日　平成７年度入学式（於　体育館）
〔新入生 100名（うち女子学生 33名）〕

17～18日
新入生研修（於　第１～４セミナー室）

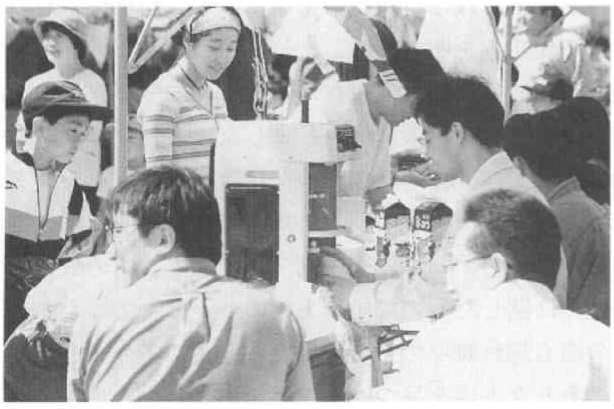
21日　医師国家試験合格発表
（本学合格者 106名、合格率98.15％）

入学式

6月

２～４日
第21回医大祭
（テーマ：『ルネサンス』）

30日　博士学位記授与式（於　第２会議室）
（学位記被授与者　７名）



医大祭

7月

１～９日
第42回北海道地区大学体育大会
当番校：北海道大学
本学参加種目：陸上競技（男）、準硬式野球、バスケットボール（男女）、バレーボール（男女）、サッカー、卓球（男女）、剣道（男）、弓道（男女）、ハンドボール
成績：優勝　準硬式野球
総合成績：男子７位、女子19位

地区体

７～８月
第38回東日本医科学生総合体育大会夏季大会
主管校：岩手医科大学
本学参加種目：陸上競技（男）、準硬式野球、テニス（男女）、ソフトテニス(男女)、卓球（男女）、バレーボール（男女）、バドミントン（男女）、サッカー、バスケットボール（男女）、柔道、剣道、弓道、空手道、水泳（男女）、ゴルフ（男女）、馬術、ハンドボール
成績：準優勝　テニス女子
バドミントン女子
３　位　バドミントン男子
総合成績：12位

8月

９日　平成７年度納骨式（於　本学納骨堂）

８～３月
第38回東日本医科学生総合体育大会冬季大会
主管校：千葉大学
参加種目：ラグビー、スキー、アイスホッケー

9月

6日　体育大会（学生主催）

競技種目：ソフトボール、綱引き、リレー、卓球、バドミントン、バスケットボール

20日　平成7年度解剖体慰霊式並びに文部大臣感謝状伝達式(於　体育館・第4セミナー室)

29日　博士学位記授与式　（於　第2会議室）

（学位記被授与者　6名）

解剖体慰霊式

10月

3～31日

平成7年度公開講座

「骨と関節、運動とリハビリテーション」

公開講座

11月

5日　本学記念日

12月

18～19日

スキー教室（於　北大雪スキー場）

講師4名、厚生補導委員会委員、参加学生　21名

25日　博士学位記授与式　（於　第2会議室）

（学位記被授与者　4名）

スキー教室

1月

13～14日

平成8年度大学入学者選抜大学入試センター試験（本学会場　825名）

2月

13日　小野教授最終講義

15日　竹光教授最終講義

平成8年度大学院入学者選抜試験

25日　平成8年度第2次試験（前期日程）

3月

1日　平成8年度大学院入学者選抜試験合格者発表

6日　平成8年度第2次試験（前期日程）合格者発表

7日　水戸教授最終講義

12日　平成8年度第2次試験（後期日程）

13日　小野教授、竹光教授、水戸教授歓送式

21日　平成8年度第2次試験（後期日程）合格者発表

25日　平成7年度学士学位記授与式（於　体育館）

（学士学位記被授与者　99名）

博士学位記授与式（於　第2会議室）

（博士学位記被授与者　18名）

クラブ今昔

ゴルフ部伝説

第３学年　三好　正敬

「ゴルフ部に伝説あり」。ゴルフ部ＯＢの先生方から様々な話を聞いていくうちに僕は、そう思った。とても一口では語れないが、その中で最も印象に残った事を書く事にする。

最も印象深かったのは村上達哉先生の話であった。先生は北海道学生選手権で３位となり日本学生選手権に出場されたのである。日本学生といえば学生ゴルフでは最高の大会で上位に入る者はプロになる者も多い。（倉本プロ、丸山プロ etc）

さらに先生は、このレベルの高い大会で当時日大の学生だった東聡プロとプレーされたそうである。ちなみに東聡といえば昨年ジャンボに次いで賞金ランキング２位になったプロである。先生もかなりの腕であったらしいが、さすがに東にはかなわなかったらしい。ミドルホールで２打目、先生が５Ｉで打つところを東はＰＷで打っているのをみて驚かれたという事だった。先生の功績は、今では伝説で僕もゴルフ部ＯＢの中にこのようなサムライがいたことをほこりに思っています。

旭川医大ゴルフ部は昭和48年に１期生の岡本洋先生が結成された部である。当時、原田一典先生が顧問をなされ、部員も10名ぐらいだったそうです。

その中で当時部員であった、坂本尚志先生は後輩をよく指導し、スイングの理論や練習メニューを考えるのが好きだったらしい。いつしかゴルフ部では、鬼軍曹として伝えられることになる。

「まず自分の中で目的を明確にしろ。そしてそれを達成するために、どういう練習をすればいいのかを考えてみろ」。

現在も部員にこう指導されている。

教育と実践は、部活動のみならずすべての事において大切な事であり、両方がうまくいってはじめて難関をくぐりぬけていくことができると思います。ここで書いた２人の先生の背中をみて僕たちは難関をのりこえていかなければならないし、そうしていくことで旭川医科大学ゴルフ部の歴史を作っていかなければいけないと、今強く感じています。

Jazz研究会の伝統

第４学年　高橋　　収

Jazz というものを端的に表現できる人は今の部員にはいないでしょう。私が入部したときに、Jazz を全く語れなかったのは自分だけでした。私がその時の先輩方に学んだのは、誰がどの楽器を演奏してるとか、どの曲を誰が演奏したかなどという Jazz の歴史などではありませんでした。ただ一言、「Jazzy に演奏すればいい」とだけ言われました。この一言は、私にとって非常に重い言葉で、すでに用意された楽譜を忠実に演奏してきただけの自分にとっては、なかなか理解に苦しむ言葉でした。

最もJazz 研が盛えていた頃は、バンドがいくつかできるほどで、そのレベルも今では足元にも及ばないほどでした。当時は自分達で作ったオリジナルを演奏して、それをレコード化してしまうほどの勢いでした。

現在はJazz には素人の人間が集まって、ひたすら諸先輩方の残した伝統を受け継ぐべく、Jazz にとり組んでいます。年に２～３度の演奏会の場を設け、オリジナルとまではいかないですが、有名な曲を聴き合って実際に自分達で演奏しています。

私達が先輩に一歩でも近づき、Jazz 研を発展させるためには、Jazzy な音楽を追求することでしょう。Jazz 音楽はたとえ同じ曲であっても、全く同じ演奏者が再びそれを演奏する時に決して同じであることはありません。つまり、Jazz には高度なテクニックを要求されるのではなく、限りない創造性に基づくユニークな表現が要求されるのであり、今ある私達に求められている事なのです。

逆を言えば、その場の気分で好きに吹けるわけでまちがえるという言葉も存在しません。これがJazz 研の真髄であり伝統であり、これに関しての考え方は今も昔も変わりません。

これからは、先輩方のあたたかい御指導のもとにさらなるJazz 研の発展をめざしてがんばりたいと思います。

研　究　室　紹　介

臨床検査医学講座　　講師　林　由紀子

臨床検査医学講座のメンバーは、池田教授を中心として、林、河端、幸村の３教官と事務の菅野さんの５人です。検査医学は、基礎と臨床の接点としての広範な分野を含むため、研究・教育面で病院検査部のスペシャリスト達との連携は不可欠で、この点で多数の医局員に支えられている他の講座とは異なる雰囲気を有していると思われます。

教室の研究テーマは池田教授が前任の血液センター時代に発見した、膜蛋白ＣＤ36欠損血小板を主とした「血小板機能と病態」ということになります。しかしこれは出発点であり、奥深い生命現象をより根源的に探求し、病態解析、治療予防などの一層の進歩向上に寄与することを目指しています。具体的には、河端は造血幹細胞からリンパ球系に発現される転写因子、Ikaros遺伝子の構造異常の解析を行い、この遺伝子異常によるリンパ球系特有の腫瘍の発生機構の解明を目指しています。林、幸村はＣＤ36欠損の学生さん（５～６％の割合）の好意に助けられて、ＣＤ36が血小板機能発現に到る情報伝達系にどのように関与しているかを解析しています。血小板凝集、細胞内カルシウム動員に種々の制御因子が複雑に作用しながら、どのような役割を荷っているかという問題は、内外で年間数百もの報告がなされているほど興味深い分野です。それでもまだ次々と新事実がでなければならないほど不明な部分の多い奥深い現象でもあります。

予算、人員の面でもかなり小さな講座ですが、お金、人手不足の部分は、他の研究者との共同研究、検査部技師の人達との連帯などに助けられ、何よりも教授を中心とした教室全体の探求心、常識に挑戦する合理的懐疑精神を持って比較的楽しく研究しています。

講師に昇任しました

氏　　名　斉藤（さいとう）　泰博（やすひろ）
所　　属　放射線医学講座
出身大学　旭川医科大学
ひ と 言　今後は放射線診断が仕事の中心となりそうですが、出来るだけ幅広く、色々な分野とも関わり合いを持っていきたいと考えています。今後とも何卒、御指導、御鞭撻の程お願い致します。

氏　　名　門（かど）　正則（まさのり）
所　　属　眼科学講座
出身大学　旭川医科大学
ひ と 言　医師として、14年目を迎えようとしております。現在、解剖学第二講座の御指導のもとで、松果体に関する基礎的研究をしています。眼科学講座の講師として、いっそう尽力致しますので、よろしくお願い致します。

氏　　名　高畑（たかはた）　治（おさむ）
所　　属　麻酔・蘇生学講座
出身大学　旭川医科大学
ひ と 言　此の度、講師に昇任させて頂きました。平成８年２月からアメリカ留学のため、一時不在とはなりますが、麻酔学の分野を多くの方々に御理解いただきます様一層努力したいと在じます。宜しくお願い申し上げます。

平成８年度　前期分授業料免除及び延納・分納について

平成８年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する学生で、下記基準のいずれかに該当すると思われる学生は、教務部学生課厚生係で必要書類を受け取り下記の期間内に申請して下さい。

なお、申請者については、選考の間授業料の納入を猶予します。

また、不明な点は、同係に問い合わせ願います。

記

1．　授業料免除基準

(1)　経済的理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀であると認められる場合

なお、平成８年度において原級に留置されている者又は、最短修業年限を越えて在学している者は、免除の対象としない（休学の理由による者を除く。）

(2)　授業料納期前６ヵ月以内(新入生については、入学前１年以内）において学生の学資を主として負担している者(以下「学資負担者」という。）が死亡し、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合

(3)　(2)に準ずる場合であって、学長が相当と認める事由がある場合

2．　申請書類

(1)　授業料免除申請書

(2)　学資負担者が死亡した場合は死亡診断書(写)

(3)　災害を受けた場合は罹災証明書（市区町村、警察、消防署が発行したもの。）

(4)　市区町村発行の所得証明書（給与所得者については、平成７年分の源泉徴収票を、給与所得者以外については、平成７年分の確定申告書(一面・二面）等の写し（生計を一にする家族全員分）を、また、学資負担者が死亡した場合は、死亡前の所得証明書を併せて添付すること。）

(5)　失業者は、民生委員又は職業安定所の証明書

(6)　生命保険金の支払いを受けた場合は、当該保険会社の保険金支払証明書

(7)　家族の中に就学者がいる場合は、その者（申請者本人及び義務教育の就学者は除く）の在学証明書

(8)　その他家庭事情により参考となる証明書等

3．　申請期間

(1)　在学生……平成８年２月20日（火）～３月29日（金）

(2)　平成８年度入学生…平成８年４月５日（金）～４月19日（金）

平成8年度 日本育英会奨学生の募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しております。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生の募集要項を、４月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する学生は、提出期限に遅れないよう所定の書類を教務部学生課厚生係に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、同係に相談してください。

学生教育研究災害傷害保険の加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中・通学中および大学の授業等、学校行事または課外活動で施設間移動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っています。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、できるだけ全員の加入を勧めています。

なお、本年４月より通学中等傷害危険担保特約が付帯されましたので加入を希望する学生は教務部学生課厚生係に申し込んでください。

記

1．受　付　期　間　　自　平成８年４月８日(月)
　　至　平成８年４月28日(日)

2．受　付　窓　口　　教務部学生課厚生係

3．保険料（通学中等傷害危険担保特約含む）

６年間	４，３００円	（９００円）
５年間	３，７５０円	（８００円）
４年間	３，１００円	（６５０円）
３年間	２，４００円	（５００円）
２年間	１，６５０円	（３５０円）
１年間	９５０円	（２００円）

（　）は通学中等傷害危険担保特約保険料分

4．支払い保険金の種類と金額

区分／種類	正課中 学校行事中	学校施設内の休憩中 学校施設内外の課外活動中（学校施設外の課外活動については、大学に届出た活動に限る。）
死亡保険金	1,200万円	600万円
後遺障害保険金	54万円～1,800万円	27万円～900万円
医療保険金	実治療日数４日以上が対象 ６千円～30万円	実治療日数14日以上が対象 ３万円～30万円
入院加算金	１日につき4,000円	１日につき4,000円

通学中等傷害危険担保特約	
区分／種類	通学中、大学の授業等、学校行事または課外活動で施設間移動中
死亡保険金	600万円
後遺障害保険金	27万円～900万円
医療保険金	実治療日数14日以上が対象 ３万円～30万円
入院加算金	１日につき4,000円

20歳以上の学生の国民年金への加入について

国民年金法の改正に伴い、大学に在学する学生で20歳以上の者は、平成3年4月1日から国民年金の被保険者(当然加入)として適用を受けることになりました。

従来学生については、20歳以後在学中に障害者となった場合、国民年金に加入していない限り障害基礎年金が支給されず無年金となっていました。また、基礎年金制度は、原則として、20歳から60歳までの40年間加入することを前提に満額の老齢基礎年金を支給することとされていますが、学生は、任意加入とされていたため20歳以上の在学期間中に、国民年金に加入していなかったものについては、卒業後年金制度に加入しても満額の老齢基礎年金が受けられませんでした。

このため、国民年金法が改正され、平成3年4月1日から、20歳以上の学生も全て国民年金に当然加入することになりました。

なお、国民年金への加入の手続き、保険料の納付方法及び保険料の免除等の詳細については、住民票を登録している市区町村の国民年金担当窓口へ直接問い合わせください。

「新歓合宿」のお知らせ 新入生歓迎実行委員会

毎年大好評の「新入生歓迎合宿」を、今年も4月6、7日に行うことになりました。

予定されている内容は次のとおりです。まず校内では、各クラブの紹介、学年めぐりなどがあります。特に、クラブの紹介は見ものです。うちの学生のほとんどが、どこかのクラブに所属していて、各クラブそれぞれが、強烈な印象を与えようと、クラブ紹介を試行錯誤しています。校内の後は、観音ロイターに移動して、グループごとの先輩方との交流会、自己紹介を含めたゲーム、クラブ歓誘が行われ、その後は1年生だけの時間となります。新しい友と飲み明かし、語り明かし、大学生活の最初の有意義な時間を過ごせると思います。

毎年、ほぼ全員が参加しているので、今年も新入生全員が楽しめるように、上級生共々、心より新入生の参加をお待ちしています。

学内ニュース

スキー教室が留学生を交えて実施される

去る12月18日(月)～19日(火)の両日、恒例のスキー教室が北大雪スキー場で実施されました。

外国人留学生8名を含む21名の学生の参加を得、昼は講習、夜には講師及び外国人留学生を囲んでの懇親会と、楽しいひと時が瞬く間に過ぎて行きました。

初めてスキーを履いた参加者も、帰るころにはリフトに乗れるまで上達し、有意義な2日間となったようです。　(学生課)

スキー教室参加者

入院患者さんとクリスマスコンサート

室内合奏団・合唱部によるクリスマスコンサートが、12月22日(金)・23日(土)それぞれ病院ロビーで行われました。

このコンサートは、日頃の練習成果を発表するとともに、入院生活を送っている患者さんへクリスマスの雰囲気を味わってもらおうと、この時期毎年企画されているものです。

ロビーには、患者さんなどたくさんの方々が、クリスマスソングなどに耳を傾けていました。

(学生課)

室内合奏団と聴き入る患者さん

訃　報

本学名誉教授　安田　博氏（70歳）には、平成７年11月１日(水)午前５時40分　転移性肺がんのためご逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

同氏は開学直後の昭和49年４月１日に一般教育の数学教授として就任され、平成３年３月31日停年により退官されるまで永年にわたって、数学の研究と学生の教育・指導にあたられ、本学の発展・進歩に多大な貢献をなされました。

また、学術研究面では、微分幾何学、計量微分幾何学の研究を行い、その優れた研究業績は国際的にも高く評価されていました。

そのほか、本学の創設期において、一般教育のあり方について検討し、授業実施計画の策定や入学試験方法の立案、建築基本構想の参画に携わり、道北地域の医療の中心としての本学の基礎を築いたことは、高く評価されており、その功績はまことに顕著でありました。　（庶務課）

学生団体の設立・継続届について

平成８年度において、新しく設立しようとする学生団体、もしくは活動を継続しようとする団体は、４月26日(金)までに設立届または継続届を学生係に提出してください。

なお、継続届の提出がない学生団体は、解散したものとして処理しますので注意して下さい。

（学生課）

教官の異動

辞　職	95.12.31	救　急　部	助教授	宮本	政春
昇　任	96.1.16	皮　膚　科	講　師	山本	明美
〃	96.2.16	〃	〃	高橋	英俊
〃	96.3.1	救　急　部	助教授	郷	一知
配置換	96.1.1	皮膚科学講座	講　師	橋本	喜夫

窓　外

笹　嶋　唯　博

大動脈手術は夜行われる

最近、司馬遼太郎氏が腹部大動脈瘤破裂で亡くなった。大量の吐血があったことから病状を予想するに大動脈瘤が十二指腸に穿破したものと思われる。古くはアインシュタインも腹部大動脈瘤破裂で亡くなっている。大動脈疾患は大動脈瘤と大動脈解離があり、前者は高速道路の老朽化に相当し、後者は地震により土台の破壊が将棋倒しに進行する疾患に例えられる。大動脈解離は、経過が極めて速く、手術なしでは24時間以内に40%が死亡する。俳優の石原裕次郎氏が都内の某大学で緊急手術を受けたのも大動脈解離であり、高齢者と高血圧に多いのは明らかである。大動脈解離は、大動脈瘤に比べ以前は診断が困難な疾患であり、60%以上が診察を受けられないまま頓死していたと推測される如く、緊急手術の機会は多くはなかった疾患である。しかし、今や本学医療圏において人口3,000人にも満たない町村病院ですら立派なCT断層撮影装置を備え診断がつけられて紹介されてくる。今年に入り症例が急増している。旭川には心臓大血管を手術する施設が当科を含めて３施設あり、最近、名寄市立病院が加わって道北は４施設になった。人口に比べて何と過剰なことだろうと思われる方もあるだろうが、先日は、これら４施設が全て胸部大動脈手術で24時間貸切りとなった。病気の多くはなぜか夜間に発症するが、大動脈疾患も例外ではない。我々の患者は午後10時に本院に到着し、例によって夜中の12時から手術が開始された。手術の第一の目標は、心臓に向かって進展する胸部大動脈解離を人工血管に置き換え、心タンポナーデを防止することにある。手術では人工心肺で患者の体温を18℃まで冷却し全ての活動を停止させて取り換えにかかる。我々の手術は翌午後１時に終了しICU に搬送された。ICUに戻ってから主治医は家族に病状を説明し、術後管理をし、24時間眠らなかったので１日得をした勘定になる。心身共に疲弊し回復に数日以上を要するのは患者ばかりではない。このような努力にもかかわらず種々の術後合併症や解離の再発などにより、依然として死亡率は高い。このような疾患に対し救命率をいかに向上させるかが、我々の当面の課題である。オーストラリアからの報告では数100㎞の医療圏をヘリコプターが網羅し、１時間以内にはセンター病院へ搬送されるといわれる。移送時間を１時間以内に短縮し、10回の移動を４回にし、手術前準備時間をゼロにし、手術時間を半分にすることは差し当たり我々にとって不可能な目標ではなく、工夫と努力の余地はまだ多く残されている。

（外科学第一講座　助教授）